

## 十三湖大橋が完成

十三湖に架かる「十三湖大橋」が完成し十三日、渡り初め式が行われました。この「十三湖大橋」は、本体の長さが二百三十四びで、両側に幅二・五びの歩

道がつき、車道部分は六・五びの二車線です。各工事とも、塩害を避けるために鋼材はいつきい使わずコンクリートの中にはピアノ線を組み込んだ特殊工法で、総工費十一億六千三百七十万円、四十九年着工以来五年の歳月を費やして造られた永久橋です。

### 十三湖大橋特集号

## 産業振興のかけ橋に



市浦村長

白川 治三郎

村民待望の十三湖大橋が完成したことは、地域住民とともに喜びにたえません。十三湖大橋は、西北両郡を結ぶ路線としてその重要度はますます高められ、地方産業の振興に寄与することもきわめて大なるものがあります。旧十三橋は、昭和三十四年八月架設の木橋で二十年の歳



市浦村議会議長

木村 義光

その昔、日本七港の一つとして栄えた十三港。三十四年に北津軽郡と西津軽郡を結ぶ木橋が完成し、住民の積年の夢であっただけにその喜びはたいへんなものでした。以来、西北を結ぶ重要

路線として二十年間、地域発展に多大の恩恵をもたらしてきた木橋。地域住民にいろいろな想い出を残した木の橋が時代の流れと共にヒリオリドをうつことになったことは本当に寂しい気がします。

一億六千三百七十万円を投じ十月十三日竣工開通しました。十三湖大橋は、素朴な広がりを見せる十三湖を跨ぎ紺碧の日本海と遙か岩木嶺を望み、まさしく津軽文化発祥の地にふさわしいものであり、交通の要衝地点として地方産業、文化の振興発展に寄与することとはもとより、長くその効果を取めるものと存じます。また、架設以来二十年、風雪に耐えて地方産業経済発展に貢献し、数々の思い出を残してくれた木橋に感謝し、改めて関係ご当局に対し、衷心から敬意を申し上げる次第であります。

## 村内は祭り一色 盛大に渡り初め



花火の合図と同時にテープカットしました

橋の周辺には約一千人の村民と近隣町村から訪れた親友がこの行列を待ち受け、拍手を送る者、旗を振り大声で歓喜を表わす者、感激して泣く者まであり、祭り一色にまつられました。渡り初め式のあと、会場を十三小学校に移し開通式が行われましたが、白川治三郎村長は「この橋は、西北両郡を結ぶ路線として地方産業経済の発展はもとより、文化の振興に寄与することもきわめて大である」とあいさつし、橋の完成を待ち望んでいた村民の気持ちを代弁し、大きな拍手を浴びました。

## 新しい村づくりのページに

四十六年、過疎地域に指定された市浦村だが、

企業誘致、道路整備、観光開発新漁場の開発や養殖資源の有効利用等でクロスアップされていく今、「十三湖大橋」が永久橋として完成されたこととは、新しい村づくりの一ページになるものと思えます。前途叢しいことは確かですが、「十三湖大橋開通」を契機に、これら事業振興に村民一九となつて推し進めて行かなければならぬ。

渡り初め式には、地元関係者をはじめ、近隣市町村、県、

者などの関係者約千人が参加。まず現地で神事を行ったあつて午前十一時、北村正哉青森県知事、建設省山科喜一地方課長、白川治三郎村長、秋田正典議会議長、木村義光村議会議長、さらに十三小学校児童代表、中井秀行君、湯浅俊子さんの七人が、花火の合図とともにテープカット。同時にくす玉が割れ、湖上に「大漁旗」をなびかせながら

十三湖大橋の下をパレードしました。続いて、今井光男五所川原土木事務所長と山田勝明村収入役を先頭に渡り初め。列には脇元の山田弥一さん一家、相内地区の三和善次郎さん一家の親子三代夫婦、さらに陸白第九音楽隊、村内各小学校児童による鼓笛隊、市浦中のねぶた、地元青年たちのみこし、磯松、太田婦人会員の流し踊り、脇元の駒踊り、相内太刀振り「加わりの砂山」流し踊りなどが加わりました。

三夫婦を先頭に渡り初めをしました



三夫婦を先頭に渡り初めをしました

# 十三湖大橋開通に思う



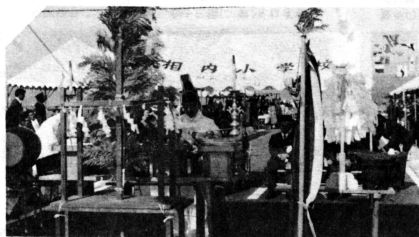
中井 秀行

(十二小六年)

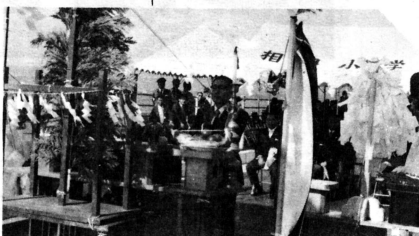
十三湖大橋が開通して、ぼくは、十三湖大橋が、十三の文化発展に、大きな役割をはたすだろうと思いました。それは、旧十三橋でも、十

三湖大橋が開通してからは、交通もさかんになり、貨物輸送量も前にくらべて、大きくかわると思つたからです。でも、交通量が増えると、それにつれて、事故件数が、

ふえるのではないかと思います。でも、その事故をふせぐには、ぼくたちがいかに、気を付ければ、半分以上はふせげると思います。ぼくたちは、もう六年生。小学校生活の、よい思い出となりました。ぼくは、この十三湖大橋の勇望姿を見て、これからの十三は、ぼくたちの、手にかかっているんだなあ、心の底から、わき上るような気がしました。



十三湖大橋の安全を神主さんがおほらい



玉串奉てんする北村知事



ワッショイ、ワッショイ…みこしでお祝い



村内各小学校の鼓笛隊

## 感激とこうふんに 手がふるえ

湯浅 俊子

(十二小六年)



輝く太陽のすばらしい朝だ。今日は十三湖大橋の開通式である。私には、こてきと開通式のテープカットの任務がある。「しつかりやう」と心に聞かせた。新橋には参加

者と観客が何千人も集まっている。やがて静まりと共に神主さんのお祈りが、おそかな音で伝わってきた。えらい人達と一緒に開通のテープにハサミを入れる。児童代表で

私もその中の一人となった。感激とこうふんで金色のハサミを持つ手がふるえていた。その瞬間頭上のかす玉が割れて大観声と大握手が起り大勢の祝賀パレードが動き出し十億六千万円の大金と長い年月をかけた、この大橋にふさわしい祝福の大声援である。私も一生懸命リラを打った。思えば、雄大な日本海の海原が光をはなえとして私の心を感動させた。二度とない貴重な体験を最良の思い出として、一生大切にして行きます。

「郷愁の橋」に感謝

高橋 信夫

(十三)



その昔、十三湖は日本海の良港として栄えていたと語りつがれているが、今は昔話としてその面影を偲ぶすべもない。

太宰治が「人に捨てられた孤独の水まり……」と表現しているが、十三湖はわびしさだけに包まれヤマセが吹いても西風が吹いても湖水はどわめき、人々を泣かせてきました。

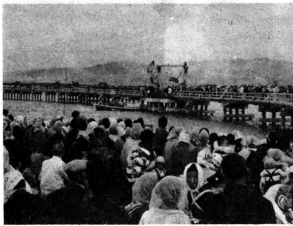
最近代的な土木技術の粋をこらして三十四年に木橋が完成し、特産ヒバのまばゆい白木の長大橋が架設された時の地元住民の喜びようはとても言葉では表現できるものではありませんでした。

十三橋の完成は、地元住民の永年の悲願だっただけに、まさに津軽の夜明けをつけるものとして数日間におよんで祝賀行事をくりひろげたものでした。

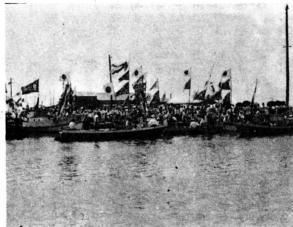
船が入りやすさのための可動設備とか、車の待避所を設けていることも話題となり、津軽十三湖の名所として数多くの観光客にも親しまれてきました。

二十年間という長い年月を風雪に耐え、西北両郡のかけ橋として地方の産業経済発展に役割りを果たしてきた十三橋、私たちに数々の思い出を残してきた木の橋が、永く橋とその役目を交替しようとしている。

「老橋は死せず、ただ消えるのみ……」もう華かさはなく消える運命を持つ十三橋に感謝し、私たちは後世に長く語りついで行かなければならぬだろう。



十三橋の完成は永年の悲願でした(十三橋完成渡り初め風景)



大漁旗をなびかせ数日間におよぶ祝賀行事をくりひろげました

渡し場の思い出

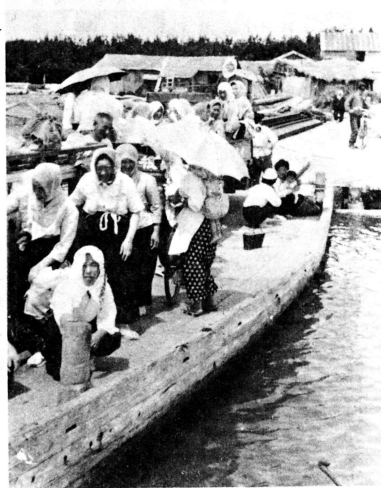


山内 英太郎

(相内)

大正四・五年頃十三の学校に通っていた。当時渡し場は中居雄さんで白いアゴひげを伸ばしていました。天気が悪いと心配でしたが、早く帰れと先生が言ってくれました。そんな時は白い旗をたててもなかなか舟が来ない。荒れている

ときはお客をためてから舟を出すからです。舟に乗ると波しぶきでびしょ濡れになる。天気の良い時は帆をかけて走るのだからまっすぐに気持ちよい。ある年の嫁入れ季節の秋のことでした。富海から太田へ



果敢になり、機嫌船になっても、その不便さは橋の比ではなかった

行く嫁が渡し場へ着いた日は西風が強く湖は大荒れだった。その朝、嫁迎えから祝儀をもらった直八は荒れているが舟を出した。波が舟べりを越えて入ってくる。舟がどんどん流される。嫁も仲人も怖れて泣き出した。直八は叱りつけ、動くよ死ぬぞと叫んだ。ようやく中島へ流れ着いたそうだが、あんなに怖かったことはない。と仲人の方は語っていた。その時のお嫁さんは今も達者でいるだろうか。

# 「孤独で 寂しそうな木橋が…」



高松 康徳

(市浦中三年)

あの日は本当に暑い日で、開通式の開始を待っている時間が何倍にも感じられた。いざなふた運行となつたものの、橋の上は予想以上に暑く、5分とせぬうちに顔中汗だくとなつてしまいました。たしか、橋の中ごろまで行つたときだと記憶しています。一動作おくりていたようです。

## 十三湖大橋



近藤 範子

(市浦中三年)

つい先日、十三湖大橋の開通式が行われました。私はこの開通式を、どれだけの人々がどのように祝ってくださるのか少し不安な気持ちでした。でも、あれだけたくさんの方が、思ってもいなかったほどの盛大に祝つてく

ださつてとてもうれしく思いました。それから私はあの新しい橋が「死」事故場」と書かれた看板で、印象を悪くするようなことはけつてあってはいけません。と思いました。

## 欄干に花束を供え 十三橋の「お別れ会」

長きを語り、当時から、夢のかけ橋」として観光客にも親しまれ、映画やテレビドラマのロケにも登場。さらに五十二年の「あすなる国体」では、この十三橋が自転車ロードレースのコースとして大任を果たしました。

市浦村観光協会(工藤章二郎会長)では、去る十月十日午前十一時から白川治三郎村長、工藤章二郎観光協会長はじめ、村内の団体代表者ら約三十人が出席して、十三橋との「お別れ会」を開き、風雪に耐えてきた二十年間の「労」をねぎらいました。

十三湖大橋が開通したことにより、旧十三橋は二十年間の任務を終え、全面通行止めとなり、米春早々には解体されて姿を消すことになりました。この木橋は、湖沼に架けられた橋としては全国有数の

もので黙とうをささげたあと、橋の欄干に花束を供え、工藤章二郎会長が「永年親しまれてきた十三橋が、新しい十三湖大橋の開通と同時に重要な使命を終えようとしていることに対し、われわれは惜別の

情を禁じ得ません。架設以来二十年風雪に耐えて地方産業、観光開発などに大きく貢献した。本当にご苦労さまでした」と感謝の言葉をのべました。続いて関係者らが、開通当時から現在まで数々の思い出



数々の思い出を語りあいながら涙り納めをしました



橋の欄干に花束を供える関係者



観光開発等に大きく貢献した十三橋に「労」をねぎらう

話を交わしながら往復。木橋南側の欄干にも花束を供えるなど、関係者はさわやかな秋晴れの下、十三橋のお別れ会かには感慨ひとしおのひとときを過していました。

## まぶね 馬舟の頃



工藤 章二郎  
(十三)

約五十年前……。  
当時十三湖を航行する機械船といえば、私が運転していた改修工事専用のランチぐらいのものであった。  
渡し守りは小山内直八さんで、風のよい日は憎憎で渡し、風のよい日は帆を張り、強風の日は休みであった。荷馬車を渡す馬舟は長さ十五位、幅四、五位の長四角の舟で

あった。南側から北側まで五本ぐらいの柱を立て「わら綱」をつたわって渡したものです。  
……あるヤマセの強い日、お嫁さんを乗せた馬舟の綱が切れて流された。「SOS」が直八さんの身振りを確認したので、ランチを運転してひいてやったことがあった……。その後、直八さんも機械船



馬舟は、柱を立てわら綱をつたわって渡したもので……。 (工藤章二郎書)



病人、行商人、釣り人などいろいろな人たちが渡し舟を利用した



強風での渡し舟には常に危険がともなっていた

にしたが機械は苦手らしく、時々故障を起していた。なかなかおろさない機械に腹をたてた直八さん「アイヌ、このおー」とハンマーで機械をたたき、小便を引かけた笑話が残っている。



20年間も風雪に耐えてきた十三橋は今、別れを告げようとしている (完成当時の木橋)

働きたくても仕事する場もなく、事故寸食う米にも事欠くあの終戦直後の苦難の時代に十三湖に橋をかける運動が、十三の青年達の手によって始められた。大人の共感を呼びび村当局を動かし、十三湖周辺青年会議へと進展、地域の大き

### 編集後記

十三湖の風景にピッタリの木の橋。市浦村の「願」して観光宣伝し、多くの人たちに親しまれてきた木橋が十三湖大橋開通に伴って姿を消すことは、まづの寂しさを感しますが、当時の寂しさを思い出し、十三湖大橋の完成を祝い特集してお届けします。(K・K)

## 素朴な木の橋…… 十三橋よサヨウナラ



高松 隆 三  
(十三)

五所川原まで片道三時間も要し、冬にはバスが止まる事があたりまえの時代であった。

急病人が出て、災害があとまよって吹けば渡し船は欠航し、跳べば届きそうながあたりまえの時代であった。一本の川で村が分断されていた。こうした中で、人が通れさせたいもの、橋が欲しいや町村合併すれば橋が出来るだろう、これがこの地方の切ない願いであった。積年の夢であった。

働きたくても仕事する場もなく、事故寸食う米にも事欠くあの終戦直後の苦難の時代に十三湖に橋をかける運動が、十三の青年達の手によって始められた。大人の共感を呼びび村当局を動かし、十三湖周辺青年会議へと進展、地域の大き

なうねりとなって発展した。知事閣下といわれた官選知事の時代であり、知事の確約を得たのは二十二年の正月、ご用始めのあいさつ直前であった。  
そして二十三年に県営渡船に、三十四年には待望の十三橋の実現、今回の永久橋へと進展したのである。  
十三湖大橋の完成を喜ぶ前に、ふるさとを愛する当時の若者の情熱と先見性に感謝すると共に、予期しない交通事故により、人柱となつて十三湖の藻屑と消えた多くの方々のご冥福を祈りたいものである。厳しい風雪に耐え、私どもにいろんな思い出と夢を与えてくれた素朴な木の橋、十三橋よ、ご苦労さまでした。サヨウナラ……。